

1. 沿革

古代阿波の忌部氏^{いむべし}が今の安房の地に上陸し、粟、麻、木綿の栽培法を教えたので、粟に基いて阿波にちなみ「安房」の名が起り、麻のよくそだつ国を「総」^{ふさ}の国といつた。後に都に近い所^{かみ}を上総、遠いのを下総^{しも}といつた。こうして安房^{あわ}、上総^{かずさ}、下総^{しもふさ}の三国が定つたのである。

大化改新以後それぞれの国には、国司の役所が置かれ、その所在地として、安房国国府村、上総国市原郡市原村、下総国市川市国府台がえらばれた。蝦夷経営の要地として、軍団が設けられ、駅^{かき}の制度も整つていた。そして、奈良時代にはこの三国にそれぞれ国分寺が建立されて、地方文化の中心となつたようである。

平安時代には地方政治が紊乱して、天慶年間に平将門の乱が起り、ついで平忠常の反乱等もあつたが、源頼朝が鎌倉に幕府を開くに先立つては、千葉常胤、上総広常の功があり房総に大きな勢力を占めていた。

のち北条、吉野の両時代を経て、室町、戦国時代となり、中央政権の争奪戦^{かんとうかんれい}や関東管領の対立抗戦の中に巻きこまれたので、房総の地は四分五裂して人民は大いに苦しんだのであつた。

やがて、豊臣秀臣が天下を統一し、関東の地を家康に与え、次いで家康が江戸に幕府を開くと、房総の地はお膝下として重要であるため、あるいは直領^{じきりょう}を置き、あるいは佐倉藩をはじめ譜代の小藩を分立せしめて、大同団結を禁じた。初期には9藩、幕末には16藩、明治初年には24藩であつた。

王政復古の大業が成ると、上総安房県と下総県とがおかれ、2年には葛飾県と宮谷県とが新設され、同年6月藩籍奉還によつて、旧藩主は藩知事となり、4年7月廃藩置県によつて県となつた。安房では館山県ほか3県、上総は大多喜県ほか10県、下総は佐倉県ほか6県、更に同11年改めて上総、安房両国を合して木更津を、下総国に印旛県をおき、6年6月木更津、印旛の両県を廃して、千葉県となし、県庁を千葉町においた。8年5月新治県所管の香取、匝瑳、海上の3郡が千葉県の管地となり、7月には葛飾郡の一部を埼玉県と東京府に、香取郡の一部を茨城県に割いて江戸川、利根川を境界とする現在の千葉県の境域が決定した。